特　別　講　演

神社の原初形態について

大阪工業大学教授　文学博士　岡　田　精　司

Seishi OKADA

神祇信仰の原初的な形態をふりかえり、そこを基点として、神社の成立過程を解明することを眼目とするものである。

神祇信仰の原形はおそらく4～5世紀の古墳時代前半期に形成したものと考えられるが、その形は、社殿等の建造物を全く伴わぬものが古い形であり、自然崇拝ー山岳・河川・海洋・岩石・森林等の精霊崇拝を源とするものであった。日本の古代においては、偶像崇拝は存在せず、また人を神にまつる風習もなかったことが、大きな特色である。

神社成立以前の祭は、年に数度ー多くは春秋2回、村はずれの清浄な地に臨時の祭場を設けて、夜の暗の中で神を山から祭場に迎えてもてなす形をとるものであった。その時に神霊に宿るものが岩石のイワクラ、常緑樹のヒモロギなどであり、それは現在の神社祭祀の中にもうかがわれる。

やがて祭の日だけ神を迎える仮設の社殿（おかりや）が設けられるようになり、それが神社建築に発展してゆくと考えられる。神社建築の様式の中でも流れ造・春日造・見世棚造などは原初形態をよく伝えるものと考えられる。

以上の問題について、原始信仰の対象物や、現行の民俗行事・神社祭祀のうちに残る、古代祭祀の名残りと推定できるものを、奈良・岡山・滋賀などの各地の具体例をスライド写真によって紹介しながら説明してゆきたい。

従来神社建築の典型のように誤解されることの多い、伊勢神宮の神明造や出雲の大社造は、このような立場から見直すとき、神社建築の発展の中では異例といってよい特殊な形態なのである。